
僕は全身全霊をかけて、君を愛す。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は全身全霊をかけて、君を愛す。

【Nコード】

N7317B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

幼馴染みで恋人の灯里と嘉依は、ずっと一緒に。けれどある時嘉依は記憶を失った。灯里の記憶だけ思い出せずにいるけれど、それでも灯里は嘉依のそばに続けた。「嘉依がまたあたしを忘れても、あたしはまたずっと一緒にいる」……。10年前に愛を誓った場所で、再び愛を誓い合う2人の、純愛ラブ・ストーリー。

僕は君に誓った。

なにがあっても僕はずっと君を愛する。

全身全霊をかけて君を愛す。

「灯里^{あかり}、今週の土曜暇？」

「うん。なに？」

「今日ちよつと行きたいところあるんだけどいいか？」

「わかった。どこ行くの？」

「さーなっ」

めでたく高1になれば、彼女とデートの約束もする。

こいつ、灯里はいわゆる幼馴染みで小さい頃からずっと一緒だった。クラス離れても一緒に遊んで花火大会にも行つて、家族同士で旅行にさえ行く。

もはや兄弟並の付き合いをしてきたとも言える。

いつから彼女なのかって聞かれると、答えにつまるな。

いつからっていうか、しいて言うなら生まれたときから？

そう言っても過言じゃないほどなんだ。

お互い付き合おうとも、好きだとも言っていない。

けれどわかる。

俺たちはずっと昔から好きあっていて、相思相愛だと。

いつだったかな。

中学2年生くらいの頃、いつものように2人でいると友達が俺たちに尋ねたんだ。

『2人って付き合ってたの?』

恋ってどういうものなのかもよく分かっていない俺たち。

俺たちは一緒にいることが当たり前で、お互いがお互いに隣にいるのが当然だった。

だからなんで一緒にいるのかって聞かれても返答は難しい。

一緒にいるのが普通だからって言うしかない。

だから、あのときそう尋ねられたとき俺たちはお互いに顔を見合わせた。

『付き合ってたのか?俺らって』

『んー、どうなんだろ。でも付き合ってるんじゃない?』

『そっか。うん、そうだよな。沢谷、お前の言うとおり俺ら付き合ってるよ』

あのときの沢谷の顔、今でも思い出すたびに笑っちゃう。

口をあんぐり開けて、なんだよそれと言わんばかりの顔をしていた。もともと俺たちが付き合ってるって噂があっただらしく、このときから噂が真実へと変わった。

付き合おうとも言っていない。

好きだとも伝えていない。

けれど、俺たちはそれが当たり前なんだ。

そんな風にしてずっと一緒に過ぎしてきた。
俺らの時間。

「あ、そうだ。嘉依^{かい}、今日の帰り新しくできたカフェ行かない？学校から割りと近いところにあるんだ」

「そういえば広告で見たかも。おー行こうぜ」

「やった♪」

昼休み、俺らは裏庭でいつものように話をする。

なんで裏庭なのかっていうと、今日は天気がよくて昼飯を外で食おうと灯里が言ったからだ。

帰りにカフェによる約束をしていると、昼休み終了10分前のチャイムが鳴る。

「やばっ。行こ、嘉依」

灯里はすくつと立ち上がって、スカートについた砂をはらう。
俺も立ち上がった。

裏庭は、階段をのぼると中庭に出る。

昇降口に向かうにはそこを通らなければならない。

階段の上から、体操服を着ている女の子2人が降りてくる。

次体育なんだ、と思っとながめながら階段をのぼっていると、女の子のうちの1人が足をすべらした。

「きゃっ・・・!!」

「あぶなっ・・・!!」

とっさに俺は受け止めようと、手を出した。
女の子は俺の上に落ちてきた。

抱きしめようとしたけど、あまりに急すぎて俺までバランスを崩す。

「くっ……」

とっさに俺は女の子の頭を覆うように、しっかりと抑えた。

ズドドドツツ……と鈍い音を立てながら体が階段からすべり落ちる。

頭の中は真っ暗だ。

指を動かそうにも、なにも感じない。

女の子は無事だろうか。

俺は死んでいるのか？

起き上がりたいのに、そんな気力が出てこない。

だれかが俺を呼ぶ声がする。

ああ、きっと灯里だろうな。

俺が落ちる瞬間を見ちまったんだからな。

ん、なんだこれ……

『灯里、やったな！同じ高校だ！』

どんどん頭の中にいろんな光景が思い浮かんでく。

まるで映画でも見ているように、その映像は鮮明ではっきりしている。

『嘉依、明日クラスがえだねえ。同じクラスになれるかなあ』

高校を受かったとき、中学のとき。

アルバムを見ているように懐かしく思い出されていく。

『小学校楽しみだね』

『うん!』

だんだん幼い日々の記憶になっていく。

ああ、やっぱりいつでも一緒だったんだよな。

あんな小さい頃から一緒にいたら、そりゃもう言葉なんかいらない。

あれ、なんだこの記憶。

小学生になる前の俺たちがいる。

そこらへんの花畑でとった花を俺が灯里に渡している。

『なにがあっても僕はずっと君を愛する。全身全霊をかけて君を愛す』

『灯里も、ずっと嘉依ちゃんを愛するよ』

愛するなんてそんな言葉、まだはやいんじゃないか？

そう思っていると、小さい俺が次の言葉を発する。

『ちょうど10年後の今日、僕たち……………』

俺の言葉がしつかりと最後まで言い終わる前に、記憶がじょじょに薄れていく。

もうなんの記憶も思い出せなくなると同時に、俺の意識は完全に失った。

「ん・・・」

ぼーっとぼやける目につつまる真っ白な天井。
そしてもう一つ、見える笑顔。

「嘉依！気がついたの？！よかったあー！」

むくつと起き上がる。

ここは・・・保健室か。

なんで俺保健室のベッドで寝てるんだっけ・・・？

「嘉依？どうしたの？」

「嘉依って俺の名前・・・だよな。あれ、俺って何年だっけ」

「な、なに言ってるの？」

頭がズキズキする。

頭の中を整理してようやく自分のことを思い出し、ふとベッドのそ

ばにいる女の子に尋ねた。

「きみはだれ？」

その女の子の他にも、あと2人女の子がいる。

2人の女の子は体操服を着ていた。

ああ・・・と、思い出したようにその子たちに話しかけた。

「無事だったんだ。よかった。体育は？」

「心配で出てません・・・・・・ありがとうございます！本当に
っ・・・」

俺が助けた女の子は無事そうだ。

もう大丈夫だから授業に戻りなよ、と言うと女の子たちはお礼をたくさん言いながら保健室を出て行った。

けれど、1人の女の子はまだそばに続けたままだった。

女の子は少しだけ肩を震わせているようだった。

そして、2人だけになったとき、その子はおそるおそる口を開いた。

「あたしのこと・・・覚えてないの？」

俺に訴えるような目をする。

けれど俺にはさっぱりわからない。

「知り合い？俺ら」

そう言っと、女の子はひどく傷ついたような顔をした。

1回下を向いて、そして再び俺の顔を見る。

目を潤ませながら、けれど俺の手を握りながら優しく微笑んて言った。

「嘉依が思い出してくれるの・・・待ってる。嘉依のそばにいるのはあたしだって、決まってるの」

そう言うとき女の子は立ち上がって、ばいばいと言いながら保健室を出て行った。

俺の手には、まだその子の手のぬくもりが残っている。

女の子に握られた方の手をぎゅっと握りしめる。

あの女の子は俺のことを知っているようだ。

そばにいるのは自分しかいないって、じゃああの子は俺の彼女？

兄妹・・・とかじゃないだろうし。

どうしてだろう。

他のことは全部思い出せたのに、あの子ことはなにもわからないんだ。

思い出す思い出せない以前に、あの子を知っているような感じがしないんだ。

まるで今、はじめて会ったような感じがする。

けど、あの子の泣きそうな顔を見たとき、俺の心がなにかを叫んでいるような気がした。

うまく感じとれなかったけど、でも確かになにかが心にチクツとしたんだ。

保健室の先生が帰ってきた。

「あら、目が覚めたのね」

「あ・・・はい」

みんなは帰ったの？と聞いてきたから、たった今帰りました、と言

う。

すると先生はこう言った。

「灯里ちゃんすごく心配してたわよ。あたしあの子と仲いいのよね、灯里ちゃん保健委員だから。だからあなたのことよく聞いてたわ」

「灯里・・・？」

「あなたの彼女の灯里ちゃんよ。なに言ってるの？」

「俺の・・・彼女？灯里って・・・じゃあさっきの女の子がそうなのか」

やっぱり彼女だったんだ、と思っていたと先生は驚いた口調で言う。

「覚えてないの？」

「あ、はい。その子のことだけわからないんです」

先生は同情の目で俺を見る。

その同情の目は俺に向けられているというよりも、さっきの女の子へ対するもののように感じられた。

俺は忘れているからなにも感じないが、あの子はいわゆる彼氏に自分の存在を思い出してもらえないんだ。

そうとうショックなんだろうな・・・

そうとも知らずに俺、なんてこと言ってしまったんだろう。

「・・・ゆっくりでいいから思い出してあげてね。きっと彼女、待ってるから」

俺よりこの人のほうがあの子のこと知ってる。

俺は、なにも知らない。

そう思うとすごくはがゆかった。

教室へ戻ると、ちょうど掃除の時間になっていた。

俺が倒れたのが昼休みだから、5限と6限の間ずっと寝てたのか。・・・2時間もそばについてくれたんだよな、授業も出ずに俺が起きるの待っててくれたんだよな。

俺が教室へ入ると、みんながかけよってきた。

「嘉依、平気かー？」

「まじビビったぜ！頭大丈夫？」

クラス中のみんなが俺にそう言う。

俺は慌てて大丈夫大丈夫、と言ってその場をなだめようとした。そうこうしていると、さっきの子と目があつた。

「あ・・・」

同じクラスだったのか。

俺はかける言葉も思い浮かばずに、困惑する。すると俺の親友の大谷が言った。

「灯里ちゃんずっと付き添ってたんだろ？まったくお前は心配をかけてー。でもよかったな、大事にならなくて。な、灯里ちゃん」

「あ・・・うん、そうね」

大谷の問いかけに歯切れの悪い返答をしている。なにを感じとったのか、大谷はその子に尋ねた。

「なに？どうかした？」

女の子は俺の顔を見て、どうしようと言わんばかりの目をする。

俺がなにも言えないでいると、女の子はこう言った。

「・・・嘉依、あたしのこと覚えてないの」

「え?・・・記憶喪失?!」

「うん」

大谷がそう言うのと、もう1人の女の子が近寄ってきた。

この子は知ってる。

俺らともよく話をする子で、仲良しの子。

・・・だれの?

だれの、仲良しの子だ?

「灯里、元気出して。大谷くん、嘉依くんをよろしくね。あたしはしばらく灯里といるから」

「おっけー」

この子は大谷の彼女でもある。

そして・・・

・・・なんだよ。

仲良しの子って、灯里って子しかないじゃんか・・・

なんでだよ。

なんでこの子のことはすっかり思い出せねえんだよ。

なんで記憶の片隅にさえ残っていない?

どうして俺は忘れてしまったんだ。

「嘉依、大丈夫か?」

「・・・ああ」

枝理ちゃん(さっきの子)はあの子を元気づけようとしている。

けどあの子は大丈夫だよって言いながら、笑ってるんだ。
さっきもそうだ。

泣きそうな顔してるくせに、俺に微笑んでみせた。

どうしてだろう。

傷つけてはいけない・・・はずなのに、逆に俺が助けられてるんだ
よな。

掃除が終わりHRも終わる。

みんな部活に行ったり帰ったりする。

俺は部活に入っていないから、荷物を持って席を立つ。

・・・俺、いつも1人で帰ってたっけ？

大谷は枝理ちゃんと一緒に帰ってるし、大谷とじゃない。

でも、1人で帰ってたわけでもない気がする。

だれかが隣にいた。

「嘉依、お前どうする？」

「なにが？」

「いつも灯里ちゃんと帰ってたんだよ、お前」

ああ、やっぱり。

その子と枝理ちゃんは俺を見ている。

俺はなにも考えずに、その子にこう言った。

「じゃあ帰ろうよ」

すると、その子の顔が少しだけパツと明るくなったような気がした。

女の子は、うんと言って俺のもとへかけよる。

別になんの意味もない。

ただ、口が勝手にそう言ったんだ。
無理に思い出そうとしてるわけじゃないし、嫌々でもない。

「じゃあな、大谷、枝理ちゃん」

「また明日！」

大谷と枝理ちゃんを残し、教室を出る。

そして普通に会話をしながら学校を出る。

女の子は、俺たちは幼馴染みで家もすぐそばだと言う。

俺がまどろっこしく、灯里ちゃんと呼ぶと、彼女は笑った。

「灯里でいいよ」

いつもそう呼んでたから、と言い加える。

じゃあ、と言いながら俺は彼女を灯里と呼ぶようになった。

まわりは仲がいいねと言ってくる。

灯里はいつものことよ、と言って笑うんだ。

つきない会話。

いつもこんな風に話をしていたのか。

「なあ」

彼女に話しかける。

灯里はなに？と言って振り向いた。

「あのさ、俺らって・・・どんな関係？あ、いや、変な意味なんか
じゃなくって・・・」

「いつから付き合ってるのかとか？あたしたちがどんな仲なのかとか？」

「そう、それ」

歩いている道は見慣れている。

灯里と歩くのははじめてじゃなくて、でも今の俺にとってははじめてで。

でも全然新鮮とかには感じられなくて、それが当たり前のように感じる。

俺のそばには灯里がいる。

それが常識だとも言うかのように。

灯里は少し考えて、そして言った。

「あたしたち幼馴染みの。物心ついた頃から一緒にいてね」

「へえ。じゃあ幼馴染みからの恋人なんだ」

「うん。でもこれといって付き合おうとも好きだとも言い合ってないかな」

「え？」

灯里の不思議な言い分に耳を疑う。

付き合ってるのに、付き合おうと言っていないっていう意味が理解できなかった。

聞き返そうとしたけれど、なんとなく聞き返せずにいると先に灯里が口を開いた。

「変？」

思わず、大きく首を縦に振ってうなずいた。

灯里はやっぱりそう思う？と言った。

そして、こう付け加えた。

「でもねえ、あたしたちにはそれが当然だったの。一緒にいるのが当たり前で、そばにいないくちやいけない存在」

「言葉にしくても？」

「うん。言葉になんかしなくてもわかるの。ああ、あたしたち愛しあってるんだなーって」

少しうれしそうに微笑む彼女を不覚にも見とれてしまった。すると彼女は慌てて否定する。

「あつ、でも嘉依は覚えてないんだよね。嘉依が今あたしのことを好きかどうかなんてわからないもんね」

自分でそう言いながら寂しげな表情をする。

喜怒哀楽がある子なんだな、とつくづく思った。

これが灯里なんだ。

これが、俺がずっとそばで見てきた人。

「そんなことはない。俺・・・本当になんにもわかんないけど、でもきつとそうに違いないよ」

覚えてないけど、なんにも思い出せないけど、でもわかる。

きつとこの子の言ってることは正しいと。

確証も証拠もない。

ただ、俺の心がそう言ってるんだ。

そんなこんなで、家につく。

灯里の家は俺んちのすぐ近くで、本当に幼馴染みなんだと自覚させられた。

灯里が家に入る直前に、また明日ねと言って手を振ってきたから俺も振るかえした。

そうやって、次の日もその次の日も同じように過ごした。

金曜日になった。

事故が起きてからもう4日。

特になんのさし支えもなく学校生活を過ごす。

やっぱり今の俺にとってはずっと灯里と一緒にいることは少しだけ困惑することであるけど、でもいなければいけないで俺の心がなにか言おうとする。

心の声は未だに聞き取れない。

けれど俺になにかを訴えていることはわかる。

たまに聞こえる、きつと事故を起こす前の俺の声。

けど、最近少しだけ聞き取れるようになってきたんだ。

——…のか？約束……………土曜日、
10年後……………を誓う……………——

けど、やっぱりなにを言っているのかわからない。

聞こえるのは1日に数回ほどで、いつ心が叫ぶのかも検討がつかない。

い。

けど、日に日に聞こえてくる量が多くなるんだ。
きっとそのうち完全に聞き取れるようになるはず。

いつものように休み時間、灯里と話をする。

灯里がつくってきたクッキーをつまみながら、たわいもない世間話をする。

簡単なことで笑ってくれる灯里がとても微笑ましかった。

こういう子だからこそ、灯里の記憶を失った俺が記憶を取り戻すことが出来るまで辛抱強く待っていてくれるんだ。

たぶん、灯里じゃなかったらとくに愛想をつかされてたかもしれない。

灯里でよかった、俺は心底そう思えたんだ。

灯里に抱く俺のこの感情はなんなのか。

友達とも、恋ともとらえられない複雑な思い。

「あ、そうだ。嘉依、明日は……あ、ううん。なんでもないや」

「なんだよ？ 言えって」

「んー……嘉依があたしに土曜日に行きたいところがあるって言うてたの」

「俺が？」

ああ、記憶をなくす前の話か。

土曜って明日だよな。

……ん？

心の声もなんか土曜日がどうのこうのって言ってなかったか？

「俺、どこに行きたいって言うてた？」

「それがね、教えてくんなかったの。なにがあるんだろ」

「・・・とりあえず明日空けといて」

「え？うん」

心の声の明日と、記憶がなくなる前の俺の言葉の明日。

なにか共通することがあるに違いない。

なんだろう・・・

確証はないけれど、でも記憶を取り戻すためのきっかけになるような気がするんだ。

でも、俺は今のままでもいいって思っただよな。

記憶が戻っても灯里と一緒にいることに変わりはないし、なにかが変わるわけじゃない。

だったら別に戻さなくたっていいんじゃないか。

俺は化学の授業の実験の最中に大谷にそう言った。

すると大谷はガシャンとフラスコを手荒に机の上に置く。

「ばっ・・・割れたらどうするんだよ！」

「バカはお前だー!!」

「はっ・・・」

大谷はいつになく真剣な顔をしている。

眉間にしわをよせて、普段あんまり怒らない奴だから余計に威圧感を感じる。

「・・・お前はこの4日間、灯里ちゃんのどこを見てきたんだよ」

「どこって・・・」

「灯里ちゃんはお前を傷つけないために笑ってるだけだ！」

え・・・

「そんなこともわからないお前なんか灯里ちゃんの彼氏でいること自体間違ってる！灯里ちゃんはずっと待ってるんだよ！前のお前がもう一度灯里ちゃんの前に現れてくれるのをっ」

「だ……って、記憶が戻ったところでなにも変わらないだろ。灯里だって……」

俺が歯切れ悪くそう言つと、大谷はキツと俺を睨んで、一言こう言つた。

「……もういい。お前には灯里ちゃんを好きでいる資格すらない」

そして大谷は再び実験をし始めた。

俺は呆然と大谷を見たまま、一步も動けなかった。

大谷が言っている意味が理解できなかった。

前の俺と今の俺のなにが違うのか。

そばにいるだけなら今の俺にだってできるじゃないか。

化学を終えて、それでもなお、もんもんとしている俺に灯里が話しかけてくる。

「お昼どこで食べる？」

「あ、俺ちよつと購買行ってくるから、あー……屋上にでも行つてて」

「屋上ね。今日は天気いいからきつとすがすがしいねー」
「だろ」

そして灯里はお弁当を持って、屋上へ向かって行つた。

俺は1階にある購買へと向かう。

メロンパンと焼きそばパンを買つて、小走りで屋上へと向かった。

屋上はあまり昼休みは人が来ないから穴場だ。

屋上への階段をのぼり、屋上のドアを開ける。

灯里の横姿が見えた。

こっちに気づいてないようだから、そーつと行って驚かせようかと思っただけ、次の瞬間そんな思いはすぐに吹き飛んだ。

「嘉依っ……………」

なにかを手に持ち、俺の名前を呼びながらなにか透明の液体を屋上のコンクリートにポタツと落とす。

よく見ると、それは俺の写真だった。

俺の写真を持ちながら灯里が泣いているのだ。

やるせない気持ちちつていうのは、こういうものなのか。

同じ俺のはずなのに、今灯里が思い描いているのは前の俺。

灯里が恋しく思うのは、記憶をなくす前の俺なんだ。

・・・そりやそうだよな。

俺にとっては一から始めても平気だけど、灯里はそうじゃない。

この15年間、俺との思い出がたくさんあるんだ。

小さい頃一緒に遊んだはずであろう記憶も、デートをしたであろう記憶もすべて、灯里の頭の中には鮮明に残っている。

俺は忘れていたとしても、それらを覚えている灯里にとって俺という存在は灯里を傷つけるだけでしかないんだ。

・・・どうして気づかなかったんだろう。

大谷が言いたかったのは、このことなんだ。

俺にとっては今ここからはじめた方が楽で簡単で、幸せかもしれない。

けど灯里にとってはそれはこの上なく悲しく辛いことなんだ。

俺がただなかなか思い出せないでいる自分が嫌になって、そう思っ
てしまっていただけなのかもしれない。

めんどろなことから逃げ出そうとしていただけだ。

灯里のためでもなんでもない。

ただ、今という現実から目を反らそうとしていただけ。

灯里はちゃんと受け止めてくれたのに。

今の俺という存在を。

「嘉依・・・いつになったら戻ってくれるの・・・」

どうして俺は気づかなかったんだろう。

灯里の苦しみを。

知らなかったではすまされないんだ。

知っていなくてはいけないことで、それすらしよつとしなかった俺
は最低だ。

今ここで泣いている灯里を慰めるのが普通かもしれないけど、俺に
は灯里にかける言葉がなかった。

ごめんとも頑張るとも言えない俺には、泣いてる灯里のそばに行く
資格はない。

・・・いや、資格とかそんなじゃない。

今俺が出て行ったら灯里はすぐに写真を隠して目にごみが入ったの、
とでも言うんだろう。

俺が灯里をずっと見てたと言えば、きっと俺に謝るだろう。

灯里は悪くない、なのに灯里は俺のために自らを犠牲にしよつとす
る。

偽善者とかじゃなく、それが灯里で、それが灯里の優しさだから。

結局俺は灯里が写真をしまつて泣き止み、お弁当を広げるまでドア

から出ることができなかった。

「嘉依、一緒に帰ろー」

「あ、ああ」

大谷のほうをチラッと見る。

大谷は俺の視線に気づいたものの、見てみぬふりをした。

「どうかした？」

「あ、いや……」

なにも知らないという顔で灯里は微笑みかけてくれる。

俺はさっきのを見てしまったというのに。

でもそれを灯里に言う勇氣すらない俺は、やっぱり大谷の言つとお

り好きでいる資格もないのかもしれない。

—— 灯里ちゃんはお前を傷つけないために笑ってるだけだ！——

大谷に言われた言葉が頭の中でこだまする。

わかってるよ、わかってる。

わかってるんだ……

そんな何回も言わなくなつて、もう十分すぎるほどわかってる。
それでも頭の中は大谷に言われた言葉と、泣いてる灯里の姿でいっぱいだ。

「じゃあ帰ろうか」

そして灯里と一緒に帰る。

さっきの姿とはまったく逆の灯里に、少し心が痛んだ。

「でね、もうすぐ嘉依の誕生日じゃない？つていつてもまだ10日もあとだけど。だからその日から公開される映画に行かない？」

「映画かぁ。そういえば最近あんまり見てないな。なにやるの？」

「恋愛系の奴。すっごい面白いんだって」

「へえ。じゃあ行こうぜ」

誕生日か。

そういえば毎年祝ってもらってたよな。

……灯里に？

俺の小さい頃の記憶には、灯里という女の子は出てこない。

だけど、俺はいつも1人でいたわけじゃなかった。

けれどだれと一緒にいたのかまでは思い出せず、でもそれは100%の確立で灯里であると確信していた。

どうして灯里だけ忘れてしまったんだろう。

灯里が俺が記憶を失うことで悲しむくらいなら、灯里が俺の記憶を失って俺が悲しむほうがまだ。

「なあ、もし俺が……」

「ん？」

もし俺がこのまま記憶を戻せなかったらどうする？

聞こうとしたけど、やっぱり聞けない。

なんだか卑怯な気がしたんだ。

聞くことで、俺がずっとこのまま安心して記憶がないままの生活をおくってしまいそう。

「なに？悩み事？」

「そうじゃないけど……」

はやく思い出してほしい。

どうやったら思い出すんだろう。

どうして俺はあのとき階段から落ちてしまったんだろう。

いや、でもああしなければあの女の子が怪我をしていたかもしれない。

だから俺のしたことは間違っていないはずなんだ。

それでも思ってしまう。

もしあの女の子が落ちなかったら、今俺は普通に灯里の記憶もあって普通の生活を過ごしていたのに……と。

こんなこと思っ たって仕方ないってわかってる。

わかってても、やっぱり思ってしまう。

女の子を責めるわけじゃない。

ただ、そうした偶然が起こらなければよかったのに、と後悔してしまっ っんだ。

灯里は俺のよそよそしい態度を見て、なにを思っ たのか、こっ言っ た。

「・・・嘉依は今のままが嫌なの？」

俺の家の前につく。

けれど灯里がそう言っ もんだから玄関を開けることができず、俺は立ち尽くす。

「・・・お前はいいのか？」

前の俺に戻らないために泣いたのは灯里だ。

写真を見ながら俺の名前を呼んだのは灯里だ。

俺がどうのこっのっ てわけじゃなくて、灯里が嫌なんじゃないのか。俺はそんな灯里を見るのが嫌だ。

泣いてるのになにもしてやれない。

はがゆくて仕方がない。

「あたしは・・・」

灯里はしばらく言葉を発しなかつ た。

それでもなにかを言おうとしてるから、俺はじっ と待ち続けた。

「あたしには嘉依の思い出が15年分ある。楽しかったことや悲しかったこと、嘉依と一緒にいた日々はあたしの宝物なの」

「今は・・・今の俺にはそれがないんだ。それでもお前は・・・」
「それでもあたしは、嘉依のそばにいたいよ」

どうしてそんなことを言うんだろう。

別にいいんだ、俺に冷たくしたって。

突き放したって、蔑んだっていいんだよ。

「なんで・・・？俺はお前のこと覚えてなくて、なんの思い出もない。普通だったならこんな俺から離れるだろ。なんで俺なんかのために泣くんだよっ・・・！！」

お前が俺のせいで傷つくことはあつてはならない。

傷ついて泣いて、それでも俺の前では必死に笑顔を装わなければならない理由なんてないんだ。

ずっと一緒にいた幼馴染みあがりの彼女だからって、今の俺にまで同じように接する必要もない。

「俺は・・・別にそんなこと望んじやいないんだ！」

俺がもとに戻ったらそばにいればいい。

なにも今一緒にいなくなっていいいんだ。

俺がいない間に俺のことで悲しむんだったら、最初からそばにいないきゃいい。

俺だって、そんなお前を見て記憶を取り戻せないでいる俺に腹を立てなきゃいけないことにもうつんざりだ。

願って、記憶が戻らないわけじゃない。

こればかりはどうしようもないことなんだ。

「お前のその優しさって奴が俺を苦しめるんだよっ……!!」

こんなひどいことを言ってるのに、どうしてお前は涙ひとつ見せず
に、平然としている。

俺の心を見透かすとも言っているかのような瞳で、真剣な瞳で、
俺の罵声を聞いています。

文句一つも言わずに。

俺には言う言葉がなくて、かといって灯里はなにも言っていない。
そんな居たたまれない空間に打ち負けて、俺は玄関を開けて、家へ
入った。

走って階段をかけのぼり、自分の部屋へ行く。

荷物を雑に放り投げ、制服のままベッドに寝そべった。

左腕を目にあてる。

「かつこわりー……」

どうして俺ばかりこんななんだろう。

お前はそんなにも大人で、しっかり現実を受け止めているのに俺は
こんなにも子供で、現実から逃げてばかりだ。

どうしたらお前みたいになれるんだろう。

違う、そんなことはどうでもいいんだ。

ただ俺が、心にためたものを吐き出さずにはいられなくなっただけ
だ。

吐き出すことでなにかが変わるわけじゃないけど、バカな俺は自分
一人で背負いこむことができないくて、だれかに聞いてもらわなき
やすつきりできない。

失いたくない。

さつき灯里にひどいことを言っている間にも、俺自身がそう思っていた。

灯里のそばにいたいと。

言ってることが矛盾しすぎてる。

俺はそばにいたい、けれど俺のそばにいてはいけない。

俺はこれ以上灯里を傷つけたくないんだ。

たった4日、たった4日しか一緒にいないけど、それでも懐かしさとうれしさがこみ上げてくるんだ。

・・・愛してるって、俺の全身が言うんだ。

前の俺が心の中でそう言ってるのか、今の俺がそう言ってるのかは分からない。

けどどっちにしろ同じ俺なんだから、変わらないだろ。

俺はあいつを愛していて、あいつも俺を愛してくれている。

それだけなのに・・・

それだけなのに、どうして上手くいかないんだろう。

「あ・・・」

聞こえる。

聞こえる、心の声。

今日はまだ一度も聞こえてなかった、前の俺の叫び。

今度ははっきりとまるで隣でしゃべってるかのように、響いてくる。

——お前本当に覚えてないのか？約束しただろ灯里と土曜日、10年後にもう一度愛を誓うと子供の頃に約束したあの場所へ行くことを——

「10年・・・後？」

じゃあ、約束したのは10年前だと言うのか？

でも灯里が言うには約束したのは3日前で・・・

なんだ？

どういう意味だ？

10年前だから、5歳のときに約束した。

10年後・・・愛を誓う？

そして記憶を失う前の俺が、土曜日灯里と出かける約束をした。

愛を誓う・・・ために？

愛を誓うってどういうことだ？

愛を誓うもなにも、だって俺たち付き合ってるんだろ？

今更なにを誓うって言うんだ。

——でもこれといって付き合おうとも好きだとも言い合ってないかな——

そういえば、灯里がそんなことを言っていた。

俺たちは言葉にせずに恋人になった。

・・・なんで？

10年後・・・愛を誓うために？

俺はガバッと起き上がる。

そして部屋の中を見回した。

もしかしたらこの部屋のどこかになんか手がかりがあるんじゃない

か。

「そうだ、アルバム！」

どうして今まで気づかなかっただろう。

もしかしたらアルバムがあるかもしれないんだ。

灯里との、小さい頃からの思い出の写真。

俺は机の中やベッドの下まで隅々探した。

そして、ようやくふすまの奥にあるアルバムを見つけた。

あった、と歓喜をもらし、すぐさまアルバムを開く。

パラパラとめくっていても、やっぱりほとんどそこにうつっているのは灯里。

ほんとに幼馴染みなんだって思う。

なにかないか・・・そうだ、5歳の頃の写真を見ればなにがあるかもしれない。

アルバムをめくっていると、あるものを見つけた。

「1997・4・29・・・」

驚くことに、その日付はちょうど明日で10年後を迎える。

この写真になにか関係があるんじゃないか。

そこにうつってるのは俺と灯里。

灯里が小さな花を持っている。

ここは・・・

「えっ・・・」

いきなり頭の中に、変な映像が流れ込んできた。

『灯里、やったな！同じ高校だ！』

どどん頭の中にいろんな光景が思い浮かんでく。
まるで映画でも見ているように、その映像は鮮明ではっきりしている。

『嘉依、明日クラスがえだねえ。同じクラスになれるかなあ』

高校を受かったとき、中学のとき。
アルバムを見ているように懐かしく思い出されていく。

『小学校楽しみだね』

『うん！』

だんだん幼い日々の記憶になっていく。

ああ、やっぱりいつでも一緒だったんだよな。

あんな小さい頃から一緒にいたら、そりやもう言葉なんかいらない。

あれ、なんだこの記憶。

小学生になる前の俺たちがいる。

そこらへんの花畑でとった花を俺が灯里に渡している。

『なにがあっても僕はずっと君を愛する。全身全霊をかけて君を愛す』

『灯里も、ずっと嘉依ちゃんを愛するよ』

ちよつと待てよ、これ、前にも見たことがある。

そうだ、俺が階段から落ちて気絶する前に見たやつだ。
俺、これを見て記憶を失った。

確かこのあとに俺が灯里になんか言っただ。

だけど前のときは聞き取れなかった。

でも今度は……

『ちよつと10年後の今日、僕たちまたここで愛を誓おうよ。それ
まで僕は灯里ちゃんになにも言わない』

『そうしよう。灯里も嘉依ちゃんに言わないでよね。好きもなにも』

ああ、そういうことなのか。

10年後に言うために俺たちはなにも言わなかった。

違う、そんな5歳のときの言葉なんて覚えていない。

けれど、その約束が俺たちから「愛の言葉」を欠けさせていたから、
俺たちはなにも言わずとも、こうして付き合っていた。

頭で覚えていなくても、俺たちの心はあの日のことをちゃんとずっと
覚えていた。

そして俺は確か、事故にあう一週間くらい前だったかな。

このアルバムを見て、10年前のことを思い出した。

今の自分たちがあることを納得した上で、事故にあった日、灯里に
土曜日出かける約束をしたんだ。

きっと灯里も覚えていないだろうから、驚かすつもりでいたんだ。

10年後にあの日、あの場所で。

「やっと、思い出した……」

カバンの中から携帯を取り出す。
灯里に電話しようとしたけど、やっぱりやめた。
明日言おう。

さっき灯里に言ってしまったことを謝ることも含めて、全部、明日。

——
翌日

今日も天気は快晴だ。
最近ずっと晴れが続いている。
まあうれしいことなんだけどね。

午前11時、俺は灯里んちの家の前に立つ。
手をぎゅっと硬く握り締める。
つばをのみ、覚悟を決める。

そして、インターホンを押すと灯里が出てきた。

「嘉依」

「よ、灯里。したくてきてっか？」

「うん」

じゃあ行こう、と言って俺は灯里の手をひく。

どこ行くの？と灯里は尋ねたけど俺はいいから、と言ってなにも言わなかった。

30分ほど電車に乗り、10分くらい歩くと懐かしいところが見える。

ここにくるのは本当に久しぶりだ。

だって前にきたのは10年前なんだから。

お互いの家族と一緒に、ここにピクニックにきた。よく晴れた日で、近くに花畑があったんだ。

5歳の俺は、その花畑でとった花を灯里に渡した。

ここが、あの日の思い出の場所。

「ここ・・・」

家から離れていて、あの日ここに来たのも本当に偶然なんだ。

たまたま灯里の母さんが知り合いに教えてもらった穴場なだけ。

けれど小さな噴水があって、ちょっとしたアスレチックがあるレトロな広場。

中学のときは部活の遠征とかでよくこの近くまで来た。

遠くからこの広場を眺めては、なんとなく思い出せない懐かしさに見舞われていた。

「覚えてる？ここに來たの2回目だよな」

やっぱり10年も経てば、アスレチックは少しサビてしまうものな
んだろう。

噴水の水は未だにきれいだ。

「・・・昨日はごめん。昨日の昼に泣いてる灯里を見て、俺どうし
たらいいのかわからなかった。灯里を俺から引き離すのが最善の策
だと思った」

けれど、昨日灯里は俺の言葉にひるむことなく、まっすぐな瞳で俺
を見ていた。

その目は、なにがあっても俺のそばにいろと言わんばかりに強気だ
った。

そうであってはいけないのに、そうであることがうれしかった。

「そんなことあるわけないのに。あたしは別にどんな嘉依でも、嘉
依ならいいの」

「うん」

「たとえば嘉依がまたあたしを忘れても、あたしはまたずっと一緒
にいるんだから。嘉依があたしを知らないって言っても、絶対絶対
離れない」

その優しさが嫌だとも思ってしまったけど、今はその優しさに感謝
する。

記憶が戻っている今、灯里が俺から離れないでいてくれたことがう
れしく思っから。

「そう言うと思った」

俺たちだって、ケンカくらいする。
けどすぐに灯里が笑ってくれるから、次の日には仲直りしてるんだ。
そうやって俺たちは生きてきた。

「え？ちよつと待って……なんで嘉依がここを知ってるの？だ
って昔の記憶なんて……」

これからも、そうやって生きたい。
灯里のそばにいただけでいいんだ。
泣いて笑って傷ついて、それでもずっと一緒にいたい。

俺は花畑に行き、いろとりどりの花を摘む。
そして灯里のもとへ行き、微笑みながらこう言うんだ。

「なにがあっても俺はずっと君を愛する。全身全霊をかけて君を愛
す」

灯里は口を手で押さえた。
目を丸くして、すごく驚き、そしてすぐに俺に抱きついた。

「嘉依、記憶が戻ったのねっ……」

決して俺の前では見せなかった涙。
ようやく堂々と見ることができた。

「お待たせ、灯里」

これからは、悲しいことも楽しいことも一緒に分かち合っていきたい。

一人で背負いこむんじゃなく、灯里の辛さもうれしさも2人で味わいたいんだ。

そうでなきゃ一緒にいる意味がない。

10年越しの告白に、灯里はうれしさを隠し切れないでいる。

そういえば約束したよね、と泣きながら言った。

少しの間、抱き合っていると、近くを小さな男の子と女の子が通りすぎた。

「あー、お兄ちゃんたち抱き合ってる！」

「拓ちゃん、だめだよ邪魔したら」

「えー」

「ほら、あっち行こ！お花畑があるの」

「おう！」

見た目5歳ほどのその子たちの会話を聞いて、俺たちは顔を見合わせて笑った。

「かわいいー。あたしたちもあんな感じだったのかな」

「だらうな」

芝生の上に寝そべった。

隣に灯里も寝そべる。

2人で見える空は、よけい青く見えた。

ポカポカした暖かい日差し。

たまに吹く風。

そしてきれいな青空。

こんな些細なことでも幸せって感じるんだ。
でもそれはたぶん、灯里がそばにいてくれるから。

「灯里、ありがとう」

記憶をなくしても一緒にいてくれてありがとう。

バカな俺を支えてくれてありがとう。

4日間のあの灯里を忘れていた俺を受け止めてくれてありがとう。
たくさんのことがありがとうすぎて、言葉では言い切れない。

「なによお、今更」

でも、一番いい思い出ありがとうはこれからのことなんだ。

きつと俺たちは死ぬまでこうやってずっと一緒。

だから、死ぬまで一緒にいてくれてありがとう。

なんてこと、まだ死んでないから言えないけど。

でも俺にはわかるんだ。

年をとってもおじいちゃん、おばあちゃんになってもずっとこうやって青空の下で笑いあってるんだってこと。

「いや、別に」

俺たちは、10年越しに愛を誓った。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7317b/>

僕は全身全霊をかけて、君を愛す。

2011年1月16日16時22分発行